ら通りへ、ランブラスのテーブルに坐った裕福な人々に新聞を売りながら馳けて行く。その裕福な人は満足げにうなずいている。その後、電車に飛び乗って、労働者たちの区域を走り過ぎるとき、その呼び声が少し変る。「レジスタンス闘士への判決」。青白い顔をした作業ズボンの人たちが、二枚の銅貨を出すためにポケットに手を突込むとき、悲しげに頭を振る……。

X

私はスペインで二十年の刑で釈放された。そしてロンドンに向った。船上で快活なイングラッド中部地方の夫婦と話を交わした。おそい休暇を持つ余裕のある労働者だった。私は私の英語の練習をしたかった。彼等は私の郷里をたづね、私はバルセロナと言った。「あなたはほんとに幸福ね。私共があなたの美しい国に住めたらと思います」。

「われわれ」がそこに住めたら……。

清水君に懲役五年の判決

北海道庁赤レンガ爆発事件で、爆発物取締罰則違反で起訴されていた清水君に、7月2日、札幌地裁(佐野昭一裁判長)で懲役5年(求刑同8年)の判決があった。

思想や信条の自由は、あくまでも他の異なる思想や信条の持ち主との複数共存を前提とするものであり、暴力に訴えて自己を主張する行為は、秩序に対する挑戦である……と述べたが、その複数共存が、何ら共存共栄を示すものではなく、体制の全体主義を隠蔽し、支配者による下層人民の搾取を合理化する理念である以上、その欺瞞性を爆裂の閃光の中、一瞬のうちに照射しようとした清水君の斗いに対して、それは、ブル新を通じた、一方では懲役という、彼等の暴力性の誇示、他方では権力の暴力性に対する恐怖への複数共存なる理念による救いという二面による、人民に対するとりつくろいでしかなかった。我々は、今後も清水君の支援を通じて、このような策動を粉碎していかなければならないだろう。

附記―前号の僕の文に対して、清水君から訂正を求めて

きた手紙が来たので、次に載せます。

(西塔)

清水君の手紙

はいけい

リベルテールの(5・6)受け取りました。西塔さんの書いた文の中で若干ちがっている部分があるので……

国をすてた私は政治犯。黙々として政治犯となった人

たち、その人たちの沈黙は私よりもっと雄弁だ。

われわれが戦に敗れたとき、戦い続けた人々はレジスタンスになった。だが、世界に対して、レジスタンスは犯罪者となっていた。フランコが法律をつくったからだ。たとえ、政治的反对者を扱ったとしたところで、レジスタンスは憲法によってつくられた法律を破ることを選ぶのだ。そして世界は矢張りわれわれを犯罪者として認める。われわれが投獄されても、自由主義者は何の関心も持たない。われわれがテロリストだからだ。彼等は兵役忌避者たちを防衛する。彼等は無罪だからだ。彼等は暴政に苦しんで来た。しかしそれに抵抗しなかった。

私は罪人の仲間にいた。私は戦った。私は投獄され、私は生き残った。最後はもっと異例のものだろう。

(三浦訳)

ただ、未決拘留のうちの150日が寡入されている。なお、多摩美大の裏山で発見された手製爆弾5個は、没収された。判決理由の中で、裁判長は「憲法で保障された

まず、云わゆる「爆弾斗争」、これは私達の路線とは関係ありません。単にあの時(9・9)の武器が爆弾であったにすぎません。「爆弾斗争」というのは、マスコミが作り上げたキャッチフレーズだと思えます。しかし、私に爆弾に対するフェティシズムが全く無かったとは云えません。

ですから、「都市ゲリラ的な爆弾斗争」と云うよりは「爆弾斗争的な都市ゲリラ」と云った方が当たっていると思います。当時の私達の基本的な路線は「都市遊撃戦(都市ゲリラ)↓蜂起」「ゲリラ軍団↓人民軍」で、赤軍の「前段階武装蜂起」とは異なります。とはいえ、一時期「前蜂」の影響のもとに「遊撃蜂起」ということを考えたことはありますが、ということでは「爆弾ゲリラ斗争から総蜂起」という路線ではないわけです。

9・9においては、当時の情勢を「ゲリラ戦争」とは判断してはいません。「都市ゲリラ戦」へ向けての宣伝戦であり、「都市ゲリラ戦」の情況を創り出すための斗いであると認識していたわけです。そして、「戦争」という認識は全く誤りであったわけです。先進国内部での革命斗争は「戦争」という形態はとり得ないですから、戦略としての「ゲリラ戦」ということはあり得ない。しかし、戦術としてのゲリラは時として非常に有効であり

ますが。これは必ずしも武装斗争のことを云っているのではありません。日本において、あるいは、他の先進諸国においての都市ゲリラ戦は否定しますが、後進国あるいは植民地における解放斗争は、戦争という形態を取らざるを得ないし、現実にも多くの人民が斗っているわけです。ですから、現在、革命戦争の時代にある地域の武装斗争ゲリラ斗争は支持します。

ですから、リベルテールの「ゲリラとアナキスト」の中に、西独の「バーダー・マインホフ・グループ」とウルグァイの「ツパマロス」を同列に並べて批判しているのは誤りだと思います。(これを書いたのはアルゼンチンの人のようですが、軍事独裁とペロニスタに対する「人民革命軍」については何も書いていませんね)。「ツパマロス」や「アラブ・ゲリラ」のテロルは単なるテロル(バーダー・マインホフや、ロシア・ナロードニキ、ete、のような)戦争状態における、レーニンの言葉をかれば「有効に用い得る軍事行動の一形態」であり原則的にこれらを排斥することは誤りと思います。マフ

野 火

アルゼンチン

組織されたゲリラは、必ずしも革命家の集団ではないし、彼等が必ずしも一つの特定のイデオロギーを代表するとは限らない。アルゼンチンにはペロン主義者、極右ナシヨナリスト、その他たくさんのゲリラ集団がある。それらの大部分は主義をもたない報酬目当ての者が多く一番高く払う方にその労力を提供している。また全体主義的ゲリラ集団すなわちロックイストや毛沢東主義者のものもあり、この連中はどの点から見ても報酬目当ての者たちと同様に無情な者共だ。アルゼンチンのアナキストは組織暴力やテロリズムを決して容認しない。われわれは以下の概要を、アナルコサンジカリストのFORA(アルゼンチン地方労働連合)の機関紙で、アルゼンチンでもっとも古い労働新聞「ラ・プロテスタ」(一八九七年創刊で20年間日刊紙、現在は月刊)の社説から訳したものである。(サム・ウィナー訳)

われわれはほとんど四分の三世紀(75年間)というものを法の保護外におかれ、迫害され、不当に機能停止させられながら過して来たのだが、それでもわれわれ自身テロリストや誘拐者たちとは決して協力しなかった。われわれは踏みつけにされている大衆について、リベルテールの叫び声をあげて来たし、現在もあげ続けているた

ノ運動、クロンシュタット蜂起、スペイン革命戦争へ非暴力主義者はこれらを否定するでしゅうか?)が正当であるように、現代のゲリラもまた正当であると思います。以上、あまり大した問題ではないかもしれませんが、一応念のため。

最近は、こういった(戦略・戦術)ことに関して、全く考えたことがないので、全然まともりませんが、いざれ、そのうち、ゆっくりと考えてみたいと思います。では又、

追 リベルテールに海外の情報をのせるのはとてもいいですね。

6・27

清水修一

※ 文中、文がつながりにくい所があったけれど、清水君が書き洩したのだと思う。おそらく、「単なるテロル」を否定していると僕は理解した。

めに不法とされたのだ。しかし、新しいゲリラ共は権力奪取の決意を公然と宣言し、そのための準備に数百万のペセタ貨を集め、ダイナマイトやその他の爆発物の大量貯蔵を重ねている。

われわれはその反対に、リベルテールの思想を広汎に宣伝することにとめ、軍隊、警察および暴力と抑圧のすべての機構を廃止するために闘争している。権力の独占をそのままにしておいて、ひげをつけていたり、いなかったりの救世主を、何故偶像化するんだ。権力をとるためとならば、彼等は新しいイデオロギーを表明し、新しいスローガンを放送し、新しい指導者を神格化しているではないか。

共産主義者はロシアの大衆を教会とツアー礼拝から遠ざけて、レーニン廟に拝跪させるだけのことに成功したのだ。同じことがアルゼンチンのゲリラについても言える。彼等はまだアルゼンチンの大統領の前に頭を下げない。しかし彼等はチェ・ゲバラとペロンの肖像の前で平伏している。われわれは非合法に反対するのではなく、われわれは権力の獲得、誘拐および暗殺が、社会正義を遂行する方法ではないと主張するのだ。アナキズムの原理は他の全く異なる戦術を要求する。抑圧と貧困を廃止するために、われわれは自由への意志を呼びさまし奮

起させるために力をつくす。最善のそして最後の分析において、自由社会建設のための唯一の先決条件は、ゲリラの仮面をかぶっている権力に飢えた独裁者や報酬で右にも左にも動く者共に対して、みずから防衛することを決意した自由を愛する人々、自由を意識する人々である。

(黒十字より、三浦訳)

スペイン

ドイツの学生ウルフガング・クロナーは九月二十七日バルセロナで交通信号に自分を縛りつけて、スペインにおける兵役拒否者の状況を表現しようとして、スペイン刑法第一三二条によって六年ない十二年の刑の可能性に直面した。彼の弁護士マグダ・オラニッチ・セラグロンはこう語った。しかし公判は彼の逮捕から一年後の一九七三年十月まで行なわれないだろう。その間クロナーは獄につながれるのである。

「ウルフガング・クロナーの獄からの救出、および彼に必要な支持をあたえるためには、可能なすべてのことをしなければならぬ」とWRI(戦争抵抗者インタナショナル)のニューズレターは言っている。(抗議文宛先その他省略)。

コルナーが自身を交通信号に縛りつけたとき、彼はプ

ラカード三枚をかかげた。「人権を尊重しないスペインをBBC(ヨーロッパ経済共同体)に入れるな」「スペインの兵役拒否者のために法律を」「シヨルディとペペを釈放せよ」。警察が駆けつけて鎖りを切るまでには、五百人位の群集が集っていた。

スペイン

一九七三年二月十八日のエスポアル紙によれば、スペインの警察はカタラン社会党の本部を急襲して地下組織の学生指導者を逮捕し、「破壊活動宣伝文書」を押収したと公表した。警察はカタロニア統一社会党の「大学委員会」の六名を拘留し、さらに連累の検挙を継続している。

日本OPFニュース・第17号

姫路で原子東悟さんが「口と筆先だけでなく、非暴力直接行動を」と叫んで出して居られる「庶民の立場に立つカトリック反戦紙」である。ガリ版で四ページのささやかなものだが、その「四分の一世紀の奉仕を終わって」に書いて居られるように、長い間カトリック教会の中で真面目に尽して来られた原子さんが、体制の厚い壁に挑戦する姿をマザマザと見ることが出来る。アメリカの反

戦平和行動に献身するトマス・マートンのアメリカOPFに呼応して、日本OPF一粒の会を創立されたのである。トマス・マートンは原子さんに「現実から逃げ出すのではない。人界をはなれた人祈りと労働の生活を求めるのではない。人いきれたがる巷こそ、庶民として生きていく場所である」と示唆したという。

宗教が体制に密着して、庶民を欺瞞し、裏切ることが当然のことのようになっていく時に、その宗教の内部から、良心の叫びをあげるとは、宗教を否定するよりも苦難の多い行き方だ。アンジの聖フランシスや、イグナチウス・ロヨラ、フランシスコ・ザビエルなどは、ルターやカルヴァンなどのような拒否的叛逆をせずに、カトリック教会を内部から覚醒させた人々だった。

アメリカには多くのカトリックアナキストたちがいて反戦平和運動に活躍している。キリスト教の起原は、田舎大工の子イエズスが体制を批判して十字架を負うたことにある。世俗に迎合し、体制に密着せずに、原点に帰る者こそ真のキリスト者だ。庶民として、庶民の中から、庶民の声をあげる原子さんの健闘を祈る。(姫路市白鷺町51日本OPF一粒の会)

清水修一君から

はいけい お元気ですか。カゼはほとんどすっかりよくなりました。先日送っていたアナーキズムのIを読み終わりました。一年以上前ですが一度読んでいたところ大でした。先日、大島氏から「世界思潮」「プロレタリア文学集」を送っていただきました。

六月四日最終弁論があつて、次回の公判判決は七月二日です。公判のことですが、実は自分のことながら、あまり興味がなくて、何か変な言い方ですが、あまり関心がないのです。例の件に関しては、かんたんに言ってしまうと「マルクス主義的偏向」(皮肉なことに連合赤軍の諸君は肅清に対して無政府主義的であったなんて言ってますけど)、「前衛」であるという思い上がりであつたと考えるわけですが、社会的に大した事件ではなかったこと(その割に8年求刑はペラボーだと思えますが)や、バクられる以前から、当時とは思想的に変わっていったといったわけで、実のところ他人ごとの(客観的?)に考えてしまうのです。

それから暴力、非暴力ということですが、このことについて、もっと深く考えねければならないと思えますが、ぼくは暴力≡権力であるとは必ずしも考えません。権力の行使とならない暴力(暴力とは呼ばないかも知れ

ませんが」というものはあり得ると考えます。すなわち人民の国家権力に対する正当な「暴力」というものがあると思えます。

今、アイヌの問題をふくめてアジアの被支配民族にとっても関心を持っているのですが。

最近北海道ではアイヌ問題というのが、ちょっと前まではタブーだったものが市民権を得て、ブル新（北海道新聞）では二日に一度は何かの形でアイヌに関する記事がのっているのです。しかしこの道庁・マスコミの一体となったキャンペーンは、過去の和人の北海道侵略・アイヌの虐殺・アイヌに対するテッテイした収奪・ドレイ化、といったことを、全くインペイしたアイヌの日本人（和人）への同化（アイヌも日本人であるという）、現代の皇民化政策であると考えます。（朝鮮人も天皇の赤子であるといったタグイの）

実はアイヌ問題を考えるようになったキッカケは、こういった具体的な問題からでなくて、大島さんからいただいた自治民範を読んでから、社稷・共同体といったことを考えて、アイヌモシリ（人間の国）というのは一〇〇年ほど前の和人（シャモ）の侵略まで、天皇制の発生以来、終始中央権力に抗して、彼等の原始共産社会を守り続けていたのだということに気付いたわけです。この

アイヌモシリというものが、ぼくの考えていたユートピア（無政府共産社会）であると考えるわけです。ですからアイヌ・モシリの建設＝無政府社会の建設であると考えるわけです。

明治32年から現在も適用されている「北海道旧土人保護法」に、現在のアイヌの状況が明確に示されていると思います。そして、アイヌの独立、解放の闘いは日共的な「差別反対」の闘いではないことも明白です。そして権力＝マスコミの皇民化キャンペーンを粉砕するためにはアイヌ内部のブルジョアジーに対する闘いも必要であると考えます。コシャマイン・シャクシャインの蜂起に連帯して。では又、お元気で。6月9日。（住所は前月号にあります。どうか諸君から激励を）

X
関口明男君から

「滅びゆく東京の戦跡」のような文章が、この頃は、好きになってきました。と封筒に書かれています。その封筒の中に「決意表明」「闘争宣言」未知のなかまたちへの連帯のあいさつにかえて、そして手紙が入っている。

「決意表明」空しさのまったただ中で「一女性の手によって書かれたもの。」

「殺伐としたキャンペーンの中で己の未来を決定しよう

とするこの空間が我々は妙に息苦しい。」「居直り」とすら名付けられないさまざまな生きざまをさらしながら、それでもこの胸の重さの意味を知ろうと思うのです。そして我々にとって、それを知ることとは「動く」ということを意味します。

ともすれば「そんなことどうだっていいじゃない」と言ってしまう自分自身の甘さをみすえながら・・・それでもそれで・・・と。

それは人間としてのささやかな、そしてくだらないプライドのためなのかも知れない。」「またあべえしゅん」というみじめな行爲であるかもしれない。それでも、それでも様々な愚言を吐きながら我々は、これから何かをやります!!

最後にボソッと・・・世に平和という言葉があるかぎり闘うのだ!!

ふろく（何をいいたいのか我々もよくわからない・・・ハズカシイ） 七三年に咲くワレモコウ

闘争宣言

「テレビでは我が国の将来の問題を

誰かが深刻な顔をして シャベっている
だけれども問題は今の雨 傘がない

行かなくちゃ 君に逢いに行かなくちゃ

君の家に
行かなくちゃ 雨にぬれ

つめたい雨が僕
の目の中に降る

君のこと以外は何も
見えなくなる

それは いい事
だろう?

という井上陽水の切実な思いがぼくにはよく分る。ほとんど生理に近いこの「切なさ」と「やるせなさ」は「歌っておどって諸要求」というXの諸君には、決して視えないだろう。人はおそらく、その個人史の中で始めて「他者」と出合ったとき「自分以外に他人がいる」と思ったとき、他者存在を認めた、あるいは認めざるをえなくなり、始めて、生れて始めて、ほとんど生理にとどく切実さで「寂しい」と思うのだ。そして「自分がいる」どうしようもないかたちで自分があることを知るのだ。そして自分が「寂しい」ように他人もまた「かなしい」とおもう「やさしさ」をもつのだろう。それがおそらく今のこの「せつなさ」と「やるせなさ」なのだろう。

それは決して過剰な思いではない。

ぼくたちが他者の存在を認めてしまったとき、いままでの自分がかわいた砂のようにくずれてゆくのを視ただろう。そして幼年の風景や、やさしかった友達の違い出へ「帰りたい」と思うようになったのだ。

このときぼくらは他者の存在から自己の存在の重さを知

り他者の存在の重さを知ったのだ。そして自己と他者の全面的な分離の中で、ぼくらが始めて自分の言葉を持ち、そしてそれが「希望」とか「楽しい」とかのたぐいの言葉でなく「寂しい」という一言であったとき、どれほどつらかったことか。そしてこの「寂しさ」と他者に対しての「やさしさ」が自己の内側に解体をせまってくるやり場のない「せつなさ」と、それに対する「もういやだ」という想いが限界を接するあたりで、ぼくは「関係」という言葉に達せざるをえなかった。おそらくそれは外的要請の自己検閲ができない状態でむかえた最後の内的欲求とのぶつかり合いの接点なのだろう。

もし「革命ーかくめい」があるとしたらおそらくこの接点にある。そしてそれは結局「革命ーかくめい」がつまるところ「存在の存在様式ー関係のありかた」の別名なのだとはくは理解した。そう理解することは「革命ーかくめい」は遠隔希望地や夜空の赤い星のレベルから一気にこの現実の中にあることを理解せねばならないということだった。そしてまた関係はこの「せつなさ」「やるせなさ」「寂しさ」といったところから再び作りなおすしかなく、おそらくその関係の再構築の仲にしか、この耐えられそうもない「せつなさ」「やるせなさ」「寂しさ」の解決はないという結論に達せざるを得なかったの

だ。関係の再構築にあたって具体的な手がかりがもしあるとすれば、それはやはり全共闘運動の共同性を「終った」とか美化せずに逆に喰いつぶす方向性とか、ぼくたちの今の関係のありかたを徹底的に分析追及し関係のありかたを変えてゆくような方向しかないように思います。それはおそらく闘うことと同義語なのだろうと思います。これが今のぼくにできるせいっぱいの闘争宣言です」

これは関口明男の「ある愛の詩」という感じだから10部だけ刷ることにしました。4/24 AM 3・35と書き加えてある。これを書きうつしているとき、私はゆくりなくも思い出して口吟んだのは、若い日に愛誦した永井荷風の訳詩集、さんご集の冒頭のボードレールの「死のよろこび」だった。それとこれがどんな関係があるのだろうか。関口君の「ある愛の詩」といった感じが、この七十翁を若い日の感傷に引き戻したのかも知れない。

関口君は竜谷大に入ったとのこと。『ぼくの「想い」は時間的なものだろうし、ぼくはこの部屋にそれを具体化しようとしています。そしてそれを特定の仲間たちへ言葉でかけ橋するだろうと思っています』と結んでいる。

(三浦)

でいらぼん通信(やたけのおんがし、菅田正昭)から

「ことし八十一才の奥山神主家のおばあさん、奥山ち宇さんに連れられて、池の沢にある四ヶ所の神まいりに出かけた。・・・ち宇さんは大橋の弁天さんや恋ヶ奥の神々の前でローソクと線香をたむけながら、幾度も幾度も南無妙法蓮華経と唱題した。・・・僕は傍で御幣を切りながら、なんで六根清浄や大祓を唱えぬだろうなどと邪推したりして、結局何も唱えぬまま、ち宇さんの唱題に聞き入っていた。

実は青ヶ島の巫女さんたちは南無妙法蓮華経と唱題することが多いのである。といっても青ヶ島の宗旨は・・・歴史的にも一島これみな浄土宗なのである。そして神祭りをする人々は創価学会を極端に嫌うから、ましてや日常においては唱題や、否、南無阿弥陀仏の称名すら決しないのである。・・・この唱題のことだけを捉えて、青ヶ島の神道は神仏混合だといったりする研究者もいる。・・・

「とにかく巫女さんたちは人得体の知れぬがゆえに由緒正しく靈験ある祠神の前で南無妙法蓮華経と唱題する。一方、卜部の広江次平さんいわせれば人唱題もそうだが、祭文のなかの仏教の経文でさえ、誦むと頭が痛くなり、たとえ親の霊を回向するために南無阿弥陀仏を唱えても、神様が嫌って神前に出られなくなるという。

ところが次平さんの奥さんで・・・巫女さんである静江さんは、次平さんとがめられることもなく、神前でとさどさ撃若心経を読む。

そして僕はここに青ヶ島の神道の真実をみるのである。さてここで、青ヶ島の巫女さんの唱える南無妙法蓮華経について考えておこう。その由来については今のところさしたる確証はないが、恐らく昭和初年の頃ではないかと思う。というのは、長の平の金比羅神社の石場には、昭和九年十一月、村民有志の建立になる南無妙法蓮華経八大竜王神宝来日惠書なる碑文があるからだ。日惠なる人がどんな人であるか、僕はまったく知らぬがこの頃青ヶ島に布教しに来た日蓮宗の僧侶だったらしい。それはともあれ、唱題が巫女さんたちに弘まったのは、この後らしい。その動機については、次平さんによれば「巫女の多くは無学だし、むつかしい祝詞なんておぼえられない。そこでみんなで相談して南無妙法蓮華経でもいいだろうということになった」。・・・南無の意味も、妙法蓮華経の意味も知らず、ただひたすらに神々の示現を信じ、ただ意味もなく唱題することの方が、信仰という点では至高であるからだ。これはさかしらでも、からごころでもない。僕は仏教は好きではないが、卜部が六根清浄や大祓を奏上するのと同じい効果をこの唱題は持

っている。本来的な信仰者である巫女さんたちはこのことを体験的に知っているのだ」。

菅田君のこの通信は、素朴な民衆の中に南無妙法蓮華經が沈澱した文化変容の問題が含まれている。こうしていつとは知らず、誰によるともなく、採用されて保守され、固定されて、ひとつの宗教構造ができあがる。こうした構造を通じて人々は霊界に呼びかける。青ヶ島のこうした民衆の中での沈澱作用は、山伏や修験道に見られる一人の修験者が受けた啓示によるものとは、また別の形のものと言わなければならない。日が移り、年を経てこうした形式がすっかり構造的に固定すると、その中で生れたものの中に生きるものが、そうした伝統の純粋性とか固有性、正統性を口にするのである。集団が変ればまた変ったものを形成しているし、外国にはまた別なものがある。しかしそうした傾向をもつ人間というものは一つである。そうした一つの人間としての基盤こそわれわれの立場であろう。

菅田君はまた「スミヨシサマについて」というガリ版刷りの14ページのものをまとめた。大体、でいらぼん通信のまとめのようで、槍ノ坂のスミヨシサマが住吉様であるよりも、炭ヨシサマとして崇拜されていること、それと住吉さまとの関係、そして槍ノ坂天狗について、そ

れが土地の神であろうと考察している。天狗も平安時代以後、しだいに進化して人体をとり、ここでは神体をとっているようだ。(三浦)

瓜生祐喜君夫妻から

帰郷して家の農業を継いだ瓜生君は、病氣などでしばらく様子が分らなかつたが、健在だ。資本主義社会で農業に従事するということは、富農ならばとにかく、そうでない農民にとっては、ことにおくれた農村では肉体的労働、経済的経営の両面にわたって、言語に絶する苦しみがつきまとい、精神的にも、そのために、向上の意欲をして現実を批判して未来に一步を踏みこもうとする意欲を持つ者であればあるほど、荒廃の感しをまぬかれないうらう。アナリズムはもともと土に結びついた反逆の精神でもあった。瓜生君の次の手紙はその苦しみをよく表現している。無断採録である。

「毎日毎日の労働、東京にいたときは違う労働、配管工時代がなつかしい。職人気どりで毎日アパートと会社の往復がなつかしい。百姓をしているとなぜか東京がなつかしい。

親父から受け継ぐ百姓、金などはめったにもらわれない。本を買う時ぐらいいだ。それにくらべてアナキスト団体

福田和夫君たちが創刊した文芸誌である。A5判46ページの美しい雑誌だ。小説二篇と福田和夫君の詩七篇がのせられている。定価二〇〇円・送料55円・大阪市西区九条南一―四―一(福田方)あるす同人

労働運動復刻版

大島英三郎君の犠牲的な努力によって、新聞版の労働運動の完全な復刻版が出た。他でもその計画があつてもこのように完全に揃えられないと聞いている。明治大正のアナキズムの歩み、労働運動の歴史を知る上に貴重な資料であることは周知の通りである。定価は五千円だが、その形、その量から見れば、また普通郵便で郵送できないことを考えたら、いかに安いか分るだろう。どうか出来るだけたくさん売れて大島君の犠牲がいくらかでも軽減されることを祈る。取りあえず報告だけ(三浦)

植村 諦を思い出す会

6月24日午後、バー・モッサンで約20人位集った。もう14年にもなる。かつて無政府共産党事件で日本に大きなショックを与えたこの事件の委員長だった植村君は、詩人だった。しかし彼の人格が彼をとりまいた人々や詩の仲間、どんなに大きな影響力を持つものだったかが

にはどれだけの金があるかは知らないが機関誌を出し一部いくらで売る。その一部すら買えないでいる農民というか、百姓というか。その人々の日頃の理屈(字がはつきり読めない)ので、多分と思つて当てた、三浦)はどういうものか。我々は精一杯働いている。しかし農民制度を今日どうやって崩壊したら良いのか。言葉、屁理屈は簡単だ。おれも東京にいた時はそう思つて百姓変革等々と口ばししていた。しかし現実には、崩壊させるのは簡単? そこにふくむ人間、親と子・わからん

真実な、そして真剣な瓜生君が「わからん」と言うようにに現実はいろいろな問題をふくんでいる。マルクス主義者のように、弁証法だの前衛理論だのを信仰して軽率することを革命的と考えるなら簡単だが、アナリズムは人間そのものの現実を見つめて、人間の生を実現しようとする。そこに相互扶助のような保守的な考え方と、革命を目ざす現実批判との両方が含まれている。こんなことを言うのは、現実には苦惱する瓜生君には余計な説教だろう。だが瓜生君、苦しむ農民は君一人ではないというところを、も一度思い出して農民が手をつないで現実を打開する地道な行き方を考えてくれ。(三浦)

あるす・創刊号

改めてしのばれた。秋山、相沢、向井、清水の発起、

エマ・ゴールドマンの著書を訳して：

故あってエマの著書を二・三訳した。彼女の自伝、エッセイ、それに八裏切られた革命Vのまとめだ。以前八アナーキVに女性解放の悲劇と「少数者対多数者」及び年譜を作っていたから今回の本でも活用した。自伝からはクロボトキンの印象、クロボトキンの死、クロンシュタットの見聞記等を抜き出し、編集して訳をつけた。エマの書き方の特長は短文である。これは彼女にとつて英語が第二の母国語で、活動家として雄弁だったそうだから、言葉が短いのかも知れない。けれどなかなかの文章家であつて、単に事実を述べるだけの文章ではなく、告白によれば文章に工夫をめぐらしたとある。エマはユダヤ系のロシア人として生まれ、十代で米國に移住し、女工として働き、次第にアナーキズムに入りこんでいった。教育はロシア在住の際、ドイツ語で受けたそうだから、露独英が自由に読めたと思われる。米國では最初、ヨハン・モストのサークルに出入りしている。その頃は英語が不得意で宣言文を書きたくても、ドイツ語で書き英訳して貰った状態だ。革命家・活動家としての彼女はナロードニキの系譜にあり、ドイツロマンチズムの文

学的素養と米國のホイットマン、ソーロー、エマーソンのリバータリアンニズムによつて形成されたようである。彼女はニーチェとイブセンを尊敬している。ニーチェに生の肯定者を視、イブセンに自我の重視と反逆のテーマを認め、ゲルハルト・ハブットマンには社会にコミットする劇作家を評価したのだ。一般にロマンチズムといえば、若きヴェルテルの涙や月や溜息しか想いつかないが、次ぎのようなロマンチズムがある。

「浪漫的個人主義は原子的主義と鋭く対立する。十八世紀に一般だった社会契約説は、自然の中の個人が、同胞から孤立した地位を享受する。それ故何らの集団から派生することのない自然的権利を有している。しかしこの孤立は唯一のものではない。だからこの理論によれば、すべて個人は多かれ少なかれ同じ仕方であつて、原子的個人主義は、個人の唯一性を強調する。その唯一性が普遍法や原理に一致する以上のものである。…個人がグループに従属するのではなく、同位なのだ；要約すれば、自己に忠実なことで、全体の特長を最もよく表象し、貢献するのだ；」（ドイツロマンチズムと政治思想―R・W・ルーゲ）エマが個人と組織に言及する時、大体この線に沿っているように思う。彼女はクロボトキン主義

だ。だがクロボトキンかイブセンかではなく、その両方だと言っているのである。そして一八八〇年代から一九一〇年代の特にドイツ語系のアナーキストにこの傾向が強いようである。むしろエマにはドイツの神秘主義の影響は認められない。訳者はエマの思想の変化を追って行ったが注目して戴きたいのは革命において八目的は手段を正当化するかVの問題であつた。一八九〇年代の彼女とベルクマンは八正当化するVだった。この点でモストとさえ別れている。だがロシア革命の見聞では八正当化しないVに変化している。それが三〇年に亘る活動の成果だ。倫理を欠落した革命はジュスイット派のものである。そこでアナーキズムは銃から生まれず、マフノに加担できないと言ふ。

彼女は首尾一貫している。ということとは自己に忠実だと言ふことだ。その為、真剣に悩み心が血を流すのである。むしろ女らしさ、みえとかいやらしさも見せる。けどこれは生身の人間には避けられないことで、そこがまた教えられるのだ。訳者の願ひは、読者がエマの発言をとらえてきめつけるのではなく、考えるよすがとして戴きたいということである。彼女は八きめつける方が精神的労苦をしないだけやさしいのですVと言っている。

はしもと・よしはる

×

清水君に関する追記

清水君が控訴した。さらに福島の新報社から清水君支援のピラを送つて来た。あなたの個人紙、あるいはグループの機関誌、手紙を清水君に送つて下さい。

宛先 札幌市東区東苗穂町484の1札幌拘置所内

清水修一